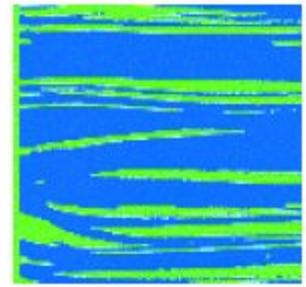


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2019年 夏号 No.95 (2019年7月29日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 武藤 崇
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

理事長就任のご挨拶……………武藤 崇
追悼文：小笠原恵先生との思い出……………平澤 紀子
追悼文：教え子の一人から……………加藤 慎吾
追悼文：訃報 Sidman 先生 (Dr. Murray Sidman) 永眠される。……………眞邊 一近
第2回産業安全行動分析学開催記……………北條 理恵子
「医療行動分析学研究会」アルバム第4頁……………飛田 伊都子
『行動分析学事典』、平成最後の日に、ついに公刊される！……………武藤 崇
自著を語る：『応用行動分析学—ヒューマンサービスを改善する行動科学—』……………島宗 理
編集後記……………ニューズレター編集部

理事長就任のご挨拶

武藤 崇

(同志社大学心理学部)

2019年6月15日(土)より、坂上貴之前理事長の後を引き継ぎ、日本行動分析学会の理事長を務めさせていただくこととなりました。坂上前理事長がお務めくださった4年間で確立された一般社団法人としての「土台」をさらに強固にし、また「学会員間の強い信頼関係と学術研究の飽くなき探求」という本学会の文化を継承していきます。また、新理事の顔ぶれも大きく変わり、「10年後」を見据えて、柔軟かつ先進的な(ただし、地に足をついた)改革にもチ

ャレンジしていきたいと考えております。

委員会構成は、前体制と同様に、①総務、②法務、③財務、④渉外、⑤企画、⑥編集の6つになります。ただし、⑥の編集委員会の業務内容に若干の修正を加えました。従来の編集委員会では、学会主導による「行動分析学に関する出版物の公刊補助・促進」を行ってきました。しかし、近年の行動分析学関連書籍の自発的な刊行が増加しているという状況を鑑み、新体制においては、「行動分析学事典」(丸善出版)の

定期的な（10年毎の）改訂を行い、それと並行して、行動分析学に関する専門用語の検討を学会として持続的に進めていくことを予定しております。さらに、学会費の値上げを可能な限り行わずに、中規模学会としての安定的な運営を

はかるため、今後、いくつかの課題に取り組むことを考えております。

今後とも、学会員の皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

小笠原恵先生との思い出

平澤紀子
(岐阜大学)

2019年4月10日（水）、東京学芸大学の小笠原恵教授が急逝されました。未だ受けとめかねています。小笠原先生との出会いは、大学院生時代にさかのぼります。当時、応用行動分析学の研究において、「機能等価性」が話題になっていました。問題行動と望ましい行動、反応型は異なっても、環境に果たしている機能からみると同じ場合がある。つまり、環境とのかかわりの中で、「なぜ、そのように行動するのか？」を理解すれば、望ましい行動を支援することができる。問題行動を減らすことから、望ましい行動を増やし、生活の質を向上させようというパラダイム転換です。これは画期的なことでした。同じような関心を持たれていたのが、小笠原先生でした。小笠原先生は、大学相談室の臨床をベースにしながら、学校や家庭、施設という生活場面の支援に関心をもたれ、精力的に研究を進めておられました。

その後、小笠原先生と交流させていただくことになり、2009年から、日本特殊教育学会で共同企画のPBS自主シンポジウムを始めることになりました。今年で13回目になります。この間、対象者への支援方法は本当によく進みました。でも、効果的な支援方法があるのに、い

まだ過酷な状況に置かれている人々がいる。私たちの関心は、そこに向けられていきました。小笠原先生は、「負の強化で維持されている支援者の行動随伴性」であると主張され、「なんとかしないと！」と話されていました。シンポのテーマもいつしか、対象者への効果的な支援方法から、支援者が効果的な支援方法を習得したり、実行したりするためにどうしたらよいかに変わっていきました。

とくに、小笠原先生は、支援が届かない実態に切り込もうとされていました。そのために、福祉施設における強度行動障害への支援実態の全国調査に取り組み、昨年はその調査結果を発表してくださいました。そして、この4月も、いつもと同じように、今年の企画を相談していたのです。小笠原先生の研究業績はわが国における行動問題支援にとって大変大きなものです。また、大学での臨床指導を通じて、多くのお弟子さんが理念を共有し、地域のリーダーとして活躍されています。いつも穏やかに「なんとかしないと」と語る小笠原先生がおられます。私にできることは、このメッセージを多くの人々と共有し、一つ一つ実現することです。

教え子の一人から

加藤 慎吾
(東京学芸大学)

バブルの象徴オヤジギャルのキャラクターが描かれたジョッキで南国のうすーいビールを飲みながら、最近彼女ができたという大学院生の話す馴れ初めをただただ嬉しそうに聞いている。土曜の夜のおなじみの光景だ。時刻は 22 時を過ぎたところ。私は後輩の恋バナに茶々を入れながら、そろそろ終電の時間を気にし始めていた。恋バナもひと段落したころ、他の大学院生が夕方に行った学部生の研究デザイン検討会について水を向ける。「そもそも、〇〇ちゃんに必要なスキルってね…。小笠原先生のいい話しキターーーーー！！心の中でガッツポーズしながら、終電はあきらめるのであった…。普段、多くを語らない先生が、ご自身の臨床観、臨床研究を行うことの意義や責任、応用行動分析学が暖かい学問であることなど、大事な話をするのは決まってお酒の席だった。それも毎回聞けるわけではない先生のいい話、教え子たちは食い入るように耳を傾けた。小笠原先生が最も大事にされていた土曜日のセラピーと夜の飲み場の場に我々が参加する行動を、間欠強化されていたのかもしれない。お通夜の後に集まった教え子たちの中でも話題になったのは、「小笠原先生は何も教えてくれない人だった」ということ。学生の頃は、「なんで何も言ってくれないんだろう。もっと、色々教えてくれたらいいのに。」と思っていたものだった。しかし、卒業生のほとんどが教える立場の仕事に就いて感じることは、何も言わずに見守ることの如何に難しいことか。「まあ思う通り好きにやってみなさい。責任は私がとるから。」という覚悟。

不出来な教え子の私は、何度となく“こと”

を起こしては、先生に助けていただいた。それは始まりから。学部 3 年生の 7 月のとある金曜日、研究室の所属希望を提出する日のこと。優柔不断な私は提出のギリギリまで決められなかった。迷って迷って、エイッと書いたのは別の研究室の名前。ここから更に悩むのが優柔不断な私。土日にあれこれと考えて、やっぱり変更してもらおう、意を決して月曜日に小笠原研究室のドアを叩いた。当然締め切りは過ぎているし、一度出した希望を覆すのはご法度なこと。大変緊張していたが、先生のリアクションはその緊張を一気に解きほぐすものであった。笑顔で「やっぱり、来ると思った」と。このような人柄が、多くの人を先生の周りに集めた。写真は、小笠原研究室の 15 周年を祝う同窓会のものだ。教え子の半分以上が集まる盛会なものとなった。会の案内に「何を成し遂げたわけではないし…。普通の居酒屋でいいのに…。ジープンでいいよね…。」などと、いつもの控えめな発言。『セミフォーマルくらいまでのラフな格好でお気軽に』のドレスコードにもかかわらず、当日は黒のドレスに白いファーという衣装でいらっしやったのはお茶目な先生らしかつた。

一人で歩くのもやつの状態になっても、本の執筆、共同研究、次年度の授業や臨床活動の準備を進めていた。亡くなる 1 週間前、最後に入院した際にも、すぐに退院するから週末に行われる予定だったセラピーの打ち合わせを 1 週間ずらすようメールで学生に指示をしている。本当に最後の最後まで自分の役割を果たそうとしていらっしやった先生。偉ぶることなく、多くを語らず、いつも穏やかに、小さな背中で

たくさんのお話を教えてくださった。これからも先生の背中を追っていきます。

ありがとうございました。安らかに。



小笠原研究室の15周年を祝う同窓会

訃報

Sidman 先生 (Dr. Murray Sidman) 永眠される。

眞邊 一近

(日本大学大学院総合社会情報研究科・生物資源科学部)

2019年5月18日に Sidman 先生が永眠されました。Sidman 先生は、1923年4月29日にお生まれになり、今年 96 歳になられたばかりでした。

衷心よりご冥福をお祈りします。

Sidman 先生は、多くの論文を発表し、多大な貢献を行動分析学にされていますが、その中でも「Sidman 型回避条件づけ」の開発、「*Tactics of Scientific Research*」の出版、「刺激等価性」の発見の3点が主なものとしてあげられます。

Sidman 先生は、1952年にコロンビア大学で博士号を取得されました。その時の研究が、それまで離散試行でのみ検討されてきた回避行動をフリーオペラント状態で実現した「Sidman 型回避条件づけ」です。反応による電撃の遅延時間が、回避反応を制御することを実証されました。当時のコロンビア大学には、個別化教授法 (PSI) で有名な Dr. F. Keller や「*The theory of reinforcement schedules*」の編者である Dr. W. Schoenfeld が学生の指導を行っており、また、学生にはスキナーの「*Schedules of reinforcement*」の共著者であり JEAB の初代編集長になった Dr. C. Ferster や刺激性制御に関する論文を多く発表された Dr. J. Dinsmoor などそうそうたるメンバーが揃っていました (Sidman, 1989)。特に、Keller 先生との関係は 50 年以上

に渡り、Sidman 先生の書かれた著述には Keller 先生への敬愛の情が綴られています (Sidman, 1986; Sidman, 1996)。

「一般的にはこの本は教科書ではないが、この本を学生に勧めたい。特に実験心理学を専攻する学生に」という書き出しで始まる「*Tactics of Scientific Research*」(Sidman, 1960) は、個体内研究法 (within-subject research design) の古典的名著として多くの行動分析家の座右の書となっています。私がメリーランド州立大学でポストドクであったときのボスである行動分析家ではない鳥類の聴覚研究が専門の Dr. R.J. Dooling と Sidman 先生の刺激等価性について話をしているとき、彼もまたこの本を読んで勉強したと言っていました。

また、音声でのネーミングは可能であるが、書かれた文字とその文字が示す絵のマッチングおよび、音声と文字のマッチングができない精神的遅滞児のマッチング訓練において、刺激等価性 (Stimulus equivalence) を発見されました。その後、刺激等価性研究は行動分析学の特徴・強みを具現化する基礎と応用が繋がった理想的な一大研究分野になりました (研究史については、Sidman (1994) に詳しく書かれています)。ブリッジ研究の重要性が指摘されていますが、基礎と応用の両方に精通し、多くの人に敬愛されていた Sidman 先生が中心におられたからこそ、基礎と応用の両分野の研究や実践が促

刺激等価性 (Sidman, M.)



The role of vocal operant and auditory stimuli on stimulus equivalence in Budgerigars.

19th Annual Meeting in the Association for Behavior Analysis, in Chicago, Illinois. May, 1993

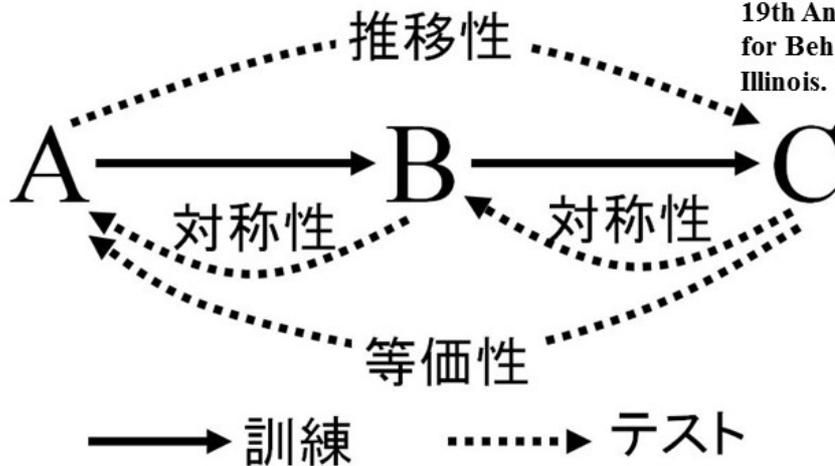


図1. 刺激等価性の説明で使用しているスライド

進されたのではないかと思います。

図1は、私が授業で刺激等価性について説明するとき使用しているスライドです。右上の写真は、1993年にシカゴで開催された行動分析学会年次大会での私のポスター発表の様子を共同発表者の河嶋孝先生が撮影されたものです。Duke大学のDr. J.E.R. Staddonのポストドクとして渡米し、その渡米した翌月に開催されたシカゴの行動分析学会年次大会で緊張しながらポスターセッションで待っていると、なんとSidman先生が来られました（ネームプレートを見て大変驚きました）。この発表は、セキセイインコの音声オペラントを使用した“Naming”実験と、鳴き声に似せて周波数変調を加えた音と色のクロスモーダルマッチング訓練と、音と形のクロスモーダルマッチング訓練後の刺激等価性テストの結果の発表でした。図2のAが音、BとCがそれぞれ色と形に対応しま

す。”Naming”実験は、その後、JEABに発表し、また、Sidman先生の著書でも言及していただき日の目を見ましたが、クロスモーダルマッチングの実験の論文発表は見送りました。1羽が、

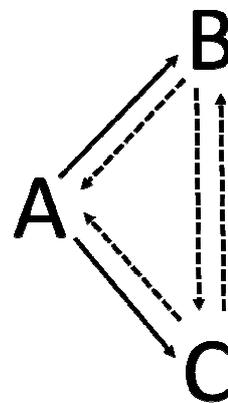


図2. 刺激等価性ダイアグラム

同一の音とマッチング訓練を受けているが、直接には訓練されていない色と形の間での相互選択の割合が丁度 75%で、統計的にも有意でした。しかし、このデータをご覧になった Sidman 先生は、「私は、選択率が 75%は十分な証拠とは思わない。なぜなら、一方のマッチングが 50%であり、他方が 100%の場合でも 75%になるからである」という主旨のことを言われました。小鳥のクロスモーダルマッチングの研究だけでも出版する価値があったのかも知れませんが、その時は、Sidman 先生がおっしゃるようにはっきりしないデータを出版すべきではないと考えました。その時にいただいた Sidman 先生の名刺には、図 2 に示している刺激等価性パラダイムの図が左上に印刷されていました。この図は、"Equivalence relations and behavior: A research story" の表紙にも使用されています。

図 1 の写真には、Sidman 先生の横で、熱心にのぞき込んで話を聞いているご婦人がいらっしゃいますが、この方は Sidman 先生の奥さんである Rita さんです。アメリカでは、学会に奥さん連れで参加することはごく普通ですが、発表会場まで一緒に来られて熱心にメモを取る Rita さんのような方には、お目にかかったことはありません。Rita さんは、Sidman 先生が忘れてしまったことなどを教えてくれる秘書の役割もされていて、Sidman 先生は、「Rita は長年、私のハードディスク（記憶媒体）でいてくれた」と書かれています (Sidman, 2002)。お二人の様子を見ていてとてもおだやかな理想的なカップルに思えました。

私はその後、メリーランド州立大学の Dooling 研究室に移動しました。丁度その頃 (1996 年)、メリーランド州立大学から地下鉄ですぐに行ける Wasington DC で開催された第 22 回行動分析学会年次大会に参加されていた佐藤方哉先生から直接連絡をいただき、Sidman 先生ご夫妻を交えた食事会 (インド料理) に参加させていただきました。杉山尚子先生や当時白梅短期大学の金子尚弘先生もご一緒でした。その時のエピソードとして、私の時計のベルトのピンが何かの拍子で飛んでしまい、時計が外れてしまいました。それを見たご夫妻

は、そのピンを一生懸命見つけようとしてくださり、大変恐縮した記憶があります。本当に親切なお二人でした。

このような数少ない交流にもかかわらず、就職活動中の私の推薦文を書いていただいたことがあります。通常は、推薦文の中身は見る事が出来ませんが、その公募での採用は残念ながら上手く行かず、開封された推薦状がそのまま私の手元に他の応募書類と一緒に公募先から送られてきたため、内容を知ることが出来ました。その Sidman 先生の過分な推薦文は私の宝物として保存されています。

もし、再度機会があれば、感謝の言葉を直接お伝えしたかったのですが、かなわなくなりました。

Sidman 先生が切り開かれた研究は、教育臨床分野に留まらず、関係フレーム理論やその応用分野にも広がり続けています。現在の行動分析学の礎を築いた行動分析家のお一人である Sidman 先生の足跡をたどる中で、その偉大さとお人柄の良さに改めて敬服しました。

Sidman 先生、ありがとうございました。

引用文献

- Sidman, M. (1960). *Tactics of scientific research*. Oxford, England: Basic Books.
- Schoenfeld, W. N. (1970). *The theory of reinforcement schedules*: Appleton-Century-Crofts New York.
- Sidman, M. (1989). Avoidance at Columbia. *The Behavior Analyst*, 12(2), 191-195.
- Sidman, M. (1994). *Equivalence relations and behavior: A research story*: Authors Cooperative.
- Sidman, M. (1996). Fred S. Keller: rememberings. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 66(1), 1-6.
- Sidman, M. (2002). Notes from the beginning of time. *The Behavior Analyst*, 25(1), 3-13.

第2回産業安全行動分析学開催記

北條 理恵子
(労働安全衛生総合研究所)

平成最後となる31年(2019年)2月17日(日)、午前10時から「高機能安全装置に関する研究の勉強会」というタイトルで、第2回公益社団法人日本心理学会産業安全行動分析学研究会主催の研究発表会を開催いたしました。

はじめに代表の北條から、本研究会の趣旨説明を行いました。機械安全にかかわる組織や団体は大きく3つに分かれます(図1)。一つは、産業現場における労働者の安全を守るための法的整備を行う機関です。これは厚生労働省の管轄です。あらゆる機械は、設計の段階から実用を経て廃棄に至る過程すべてにおいて「Safety by design」の思想で安全が考慮されていなければなりません。これらをつつがなく行う法規を定める部署です。次に、機械を作成する具体的な仕様や構成についてのきまり、すなわちISO

やJISといった「規格」や、その機械が本当に安全に作られているのかを調べ、安全であることの証を与える「認証・認定」を扱う機関です。三つ目は、実際に機械を製造する企業(メーカー)と機械を受け入れる企業(ユーザー)です。メーカーは、法規や規格に則り、安全な機械を製造し、認証・認定を受け機械をユーザーに送り出します。メーカー側は、前述のSafety by designに則り機械を製造しますが、その後に残ったリスクに対し安全防護策(設備対策)を施します。それでもなお残るリスクに対してはユーザーに対する使用上の情報提供を行い、リスクの明確化を図ったのちにユーザーに機械を受け渡します。ここまでで機械の安全性を100%担保できればいいのですが、絶対安全は存在しません。一生懸命努力しても、これ以上ないくら

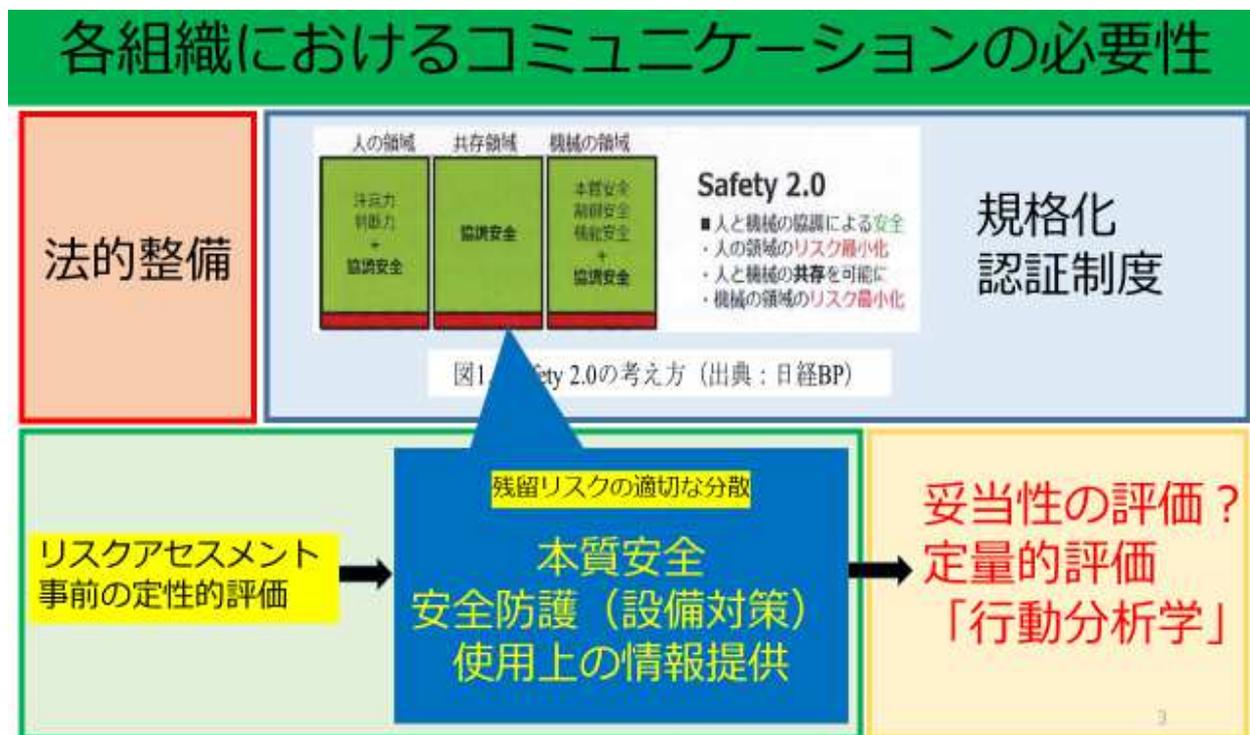


図1. 産業安全にかかわる組織及び団体

いのハイテクを駆使しても、必ず残留リスクは存在します。そのため、機械メーカーもユーザーも、事前にリスクを低減するため、あるいは未然防止の観点からリスクアセスメントを行います。しかしながら、このリスクアセスメントによる事前評価は定性的なものであること、また、リスクアセスメント後にどのようにリスクが低減されたのかを評価する妥当性についての手立ては今までありませんでした。これらの部分に行動分析学を取り入れて、残留リスクの適切な見極めと妥当性の定量的な評価に寄与することが可能ではないかと考えています。そのアイデアを取り入れていくために、前述の3つの組織と行動分析学の有識者が情報を共有することが重要であるという考えに至り、この研究会を立ち上げました。そこで、研究会ではそれぞれの組織にかかわる教育講演・話題提供・一般講演をお願いいたしました。

本稿では、安全メーカーであるオムロン株式会社商品事業本部セーフティー事業部事業計画課主査である築山和成氏、ならびに行動分析学から駒澤大学名誉教授の小野浩一先生の教育講演、そして厚生労働省労働基準局安全衛生部安全課長の奥村伸人氏の話題提供を中心に研究会開催の報告をさせていただきます。そのほか、「工学屋からみた行動分析学の面白さとその活用」というタイトルで労働安全衛生総合研究所機械システム安全研究グループの上席研究員の濱島京子氏、「障がいのある個人に対する行動分析学に基づくキャリア支援」のご講演を立命館大学総合心理学部の中鹿直樹教授、日本大学大学院理工学部修士課程1年の松井克海氏から「モバイルロボット走行環境での支援的保護システムの有効性検証実験」の話題提供がありました。



写真1. 築山氏の教育講演の様子

日本各地から45名のご参加をいただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

はじめに、オムロン株式会社の築山和成氏(写真1)から「生産現場における機械安全の現状 - 機械を安全にするためには -」のタイトルで教育講演を行っていただきました。機械安全の基本的な考え方、機械安全にまつわるさまざまな規格や法規についてご説明いただきました。そして、機械を安全化するためのスリーステップメソッド(本質安全、設備対策、使用上の情報提供)およびリスクアセスメントの意義と実際の手順について詳しく、しかもわかりやすく解説していただきました。日頃、私たちは機械や労働現場を安全に保つためにこれほどまで多くの努力を払っている人々がいることを意識していません。非常に巧妙にかつ繊細に施行されている安全方策・対策を当たり前のよう感じています。このように考えるのは私だけではなく、これほど安全を真摯に考えている領域があるのに驚いた、という参加者が何人もいました。特に日本は今まで安全な国と言われていたこともあり、安全が当然のように思うのかもしれませんが。機械安全の専門家は、このような意識をたどって「日本人は水と安全はタダ」だと思っている、と言います。その意味では、築山氏のご講演は私たちに安全を意識させ、ある意味で安全であることが非常に多くのエフォートを割くことによって成り立っているということを実感させられる大変貴重なものでした。

次は、駒澤大学の小野浩一先生による「安心・安全の行動論的基礎」という、回避行動に関する教育講演でした。講演の前半で行動分析学の基本的な考え方や法則の説明および逃避や回避行動に関する研究についての話があったあと、Galizioによる人の回避行動の実験(1979)が紹介されました(写真2)。実験参加者はセッションの始めに200セント(2ドル)が与えられますが、何もしないでいると10秒ごとに5セントの損失が生じます。一方で参加者は損失が生じる前にレバーを倒すと損失を一定時間遅らせることができるかと教示されます。そこで実験では、レバー反応による損失遅延時間の情報をラベルによって表示し、その効果を調べました。ラベルの条件を、1.ラベルなし、2.正ラベル、3.偽ラベル①遅延時間の表示があるが、実際はすべて損失なし、4.偽ラベル②表示に関わらずすべて10秒後に損失の4パターン用意し、回避行動の変化



写真2. 小野教授の教育講演の様子（ハトの動画紹介）

を測定しました。結果、ラベルがないとき回避行動は全体的に多くなり、安全寄りの回避行動が生じます。ラベルが正しい場合、ラベルに従った効率的な回避行動が生じます。さらに、偽ラベル表示時（上記4.）では、最初はラベルに従っていますが、ラベルが正しくないことがわかると、現実にあった行動に変わります。同じ偽ラベルでも、実害のない場合（上記3.）は、ラベルに従う行動が維持されます。作業現場などで、時々何をどう注意すればよいかわからない表示を見かけますが、適正でないならば、いっそのこと表示がないほうが回避行動の増加が見込めるのかもしれませんが。さらに回避行動にコストがかかる、つまり「めんどろ」である場合は、生起しにくいとのことでした。動物も人間もめんどろは嫌いで、生産的活動からのタイムアウトを嫌がる傾向があるようです。危険回避の行動はシンプルで労力を少なくし、行動に要する時間も短くする必要があります。このように、行動分析学を産業安全に応用し、ヒトの安全行動を増やすことができれば、労働災害の減少によって社会貢献を期待できます。安全機器メーカーはシンプルで使いやすい装置を開発し、作業者が使いたくなる装置を提供する必要があります。現場の管理・監督者は過去の事故やヒヤリハット事例から、危険を洗い出し、作業しやすい環境、安全行動や危険回避行動が取りやすい環境や仕組みづくりに今後取り組んでいただきたいと思います。

次に、話題提供として「安全衛生行政から期待を寄せて」のタイトルで厚生労働省の奥村伸人氏からご講演いただきました（写真3）。始め



写真3. 奥村氏の話題提供

に、「第13次労働災害防止計画」、略して「13次防」についての概要説明がありました（図2）。この13次防は2018年から2022年度にわたって厚労省が計画して行うもので、我々の労働安全衛生総合研究所の研究計画に大きくかかわってくる重要なものです。今回は2022年までに、死亡災害及び死傷災害をそれぞれ15%及び5%削減することを目標に掲げています。その目標達成のためには重点的に災害防止を推進する業種が挙げられております。私たちのプロジェクトが大きくかかわる、製造業も重点業種に入っております。このような労働災害の防止に係る厚労省の取り組みをお話いただいた後に、いわゆる偏見と呼ばれるリスク認知バイアスのお話がありました。リスクをより大きく評価するバイアスと小さく見積もるバイアスを説明いただき、バイアスをできるだけなくするためには繰り返



図2. 第13次労働災害防止計画

しの安全教育が大切であるということを学びました。また、意図的なルール違反・ヒューマンエラーを考慮したリスクアセスメントについての解説もしてくださいました。我々にとっては、研究活動に直結するお話でもあり、非常に大切なご講演だったと感じました。

以上が、今年の産業安全行動分析学研究会の報告になります。多くの参加者から自分が全く知らない分野があり、興味深かったという感想をいただきました。今後は、産業安全分野におけ

る研究の実証実験の具体的な成果を積み上げていくと同時に、行動分析学と産業分野との情報交換の場として研究会を継続して行きたいと考えております。何卒よろしくお願い申し上げます。本年度は、2020年2月15日（日）に第3回目の研究会発表会を予定しております（詳細は追って産業行動分析学研究会のHPでお知らせいたします）。皆様の次回のご参加を心よりお待ちしております。

「医療行動分析学研究会」アルバム第4頁

飛田 伊都子
(滋慶医療科学大学院大学)

平成31年3月17日に名古屋のウインクあいちにて開催させて頂きました「第5回医療行動分析学研究会」の内容をご報告申し上げます。今回の参加者は80名でした。

教育講演は、流通経済大学の教授である井垣竹晴先生に「シングルケースデザインとエビデンス：医療領域における活用について」というタイトルでご講演頂きました。全体としては、これまで因果関係の確証の精度が高いとされてきたランダム化比較試験（RCT）と比較するかたちで行動分析学のシングルケースデザインを紹介されました。冒頭に因果関係を検証する必要性について説明され、それがいかにエビデンスに基づく医療および実

践に繋がるのかについて説明されました。それをまとめたものに診療ガイドラインがあること、さらにそのグレードや分類があることもあわせて紹介されました。RCTの場合、剰余変数を統制することや厳密な群間比較をおこなうことでエビデンスレベルが上げることが説明され、内的妥当性やバイアス等、多岐にわたる内容が説明されました。その後、医療の中で、特に看護の領域においてはRCTも含めた実験デザインの論文数が少ないことに触れ、医療現場におけるシングルケースデザインは十分に普及していないことが紹介されました。しかし、医療現場で知りたいのは、普遍的な事象ではなく、平均値でもなく、個の反応なのではないのかという点

教育講演 井垣竹晴先生



座長 伊藤正人先生

を強調したうえで、そのためにはシングルケースデザインを活用することができるのではないかと説明されました。シングルケースデザインは、医療現場で実行可能性が高いこと、直ぐに介入できること、結果が直ぐに分かること等の特徴があり、その歴史についても紹介されました。RCTと比較するとシングルケースデザインの論文は一般的にはacceptされ難い現状ではあるが、行動分析学研究等の雑誌に公表する方法があることが紹介され、ABABデザインや多層ベースラインデザイン等のエビデンスレベルが認知されつつあることが紹介されました。さらに、1事例実験研究の報告の質向上のためのガイドラインとして、SCRIBE声明が紹介され、その具体的項目が説明されました。シングルケースデザインが今後認知されていくためにはRCTにおけるCONSORTのようなガイドラインができることが必要になってくることが説明され、今後シングルケースデザインが普及するためには、基準を明確化することが必要になることが説明されました。行動分析学を学ぶ者にとって、行動分析学がおかれている位置づけと歴史、将来的示唆も含めて多岐にわたる教育講演でした。

午後は話題提供として臨床現場をフィールドにした4つの演題が報告されました。

1演題目のタイトルは「学生によるシナリオ作成を導入したシミュレーション演習における教育的効果の検証」であり、A大学救命士コース在学中の4年生50名を対象にした研究でした。学生が救急現場をイメージしたシナリオを作成し、そのことによる学習効果を検証するための指標としてポストテストの成績、教員指導前後のシナリオの変化、レポート等が用いられました。その結果、シナリオを担当した場合はポストテストの正答率が高く、教員指導の前後でのシナリオ分析では医学的知識の部分が改善されることが明らかになりました。シナリオ作成は能動的学習を支援することが示唆され、今後活用できる仕組みとして書式等を改善することが必要であることが報告されました。

2演題目のタイトルは「在宅高齢者における栄養マネジメントプログラムの評価：家族参加型による介入の試み」でした。訪問看護を利用している在宅高齢者26名を対象とし、栄養を支援するマネジメントプログラムの有効性を評価する研究でした。プログラムは、食事摂取量の目標設定、食事摂取後の栄養チェックシートへのスタンプ押印、目標達成時の言語的賞賛等で構成し、指標として、Mini Nutritional Assessment Short Form (MNA-SF) と口から食べるバランスチャート (KT index)、食事摂取量が採用されました。その結果、介入群のMNA-SFおよびKT index、食事摂取量の変化率は増加し、対照群は減少したことにより、当該プログラムの有効性が示唆されました。

3演題目のタイトルは「不登校女兒に対する行動論的登校支援」でした。中学1年生の不登校女兒に対するスモールステップをベースとした行動論的介入の報告でした。中学1年の7月から他女生徒5名より陰口を言われている、悪口がメールで回っていると友人から言われ、9月には起床時に突然腹痛が出現し、10月には夜泣きやトイレに閉じこもる等の行動が追加され、不登校となりました。部活のバレーボールに参加したいという希望があり、それを第一目標とし、行動目標を段階的に作成し、徐々に悪口を言っていた女兒がいる状況に暴露、面接ごとに行動目標の見直しが試みられました。その結果、10月末から欠席日数は激減し、翌年6月には面接が終了されました。このことにより、具体的な行動目標を設定するための面接が有効であったことが示唆されました。

4演題目のタイトルは「安全な血液透析医療に資する行動的介入の検討：血液透析運転開始までの準備行動に焦点をあてて」でした。A病院透析医療センターの臨床工学技士および看護師計37名を対象に、平成25～29年度のインシデント・アクシデントレポートを分析しました。さらに3か月間にわたり透析室の1つのベッドに小型ビデオカメラを設置し、対象者の血液透析運

転開始までの準備行動を撮影し行動調査を行いました。双方とも日本透析医学会・日本透析医会から公表されているマニュアルおよびガイドラインを基に血液透析開始直後までの工程を細分化した基準で分析されました。その結果、インシデント・アクシデントレポート分析によるエラー発生工程と行動調査において非遵守率の高い工程は異なる工程であることが明らかとなりました。つまり、インシデント・アクシデントレポートのような自己申告型の報告書のみによる医療安全対策を立案することには課題があることが指摘されました。

話題提供は、いずれの発表も約25分の発表の後、約25分の質疑応答時間が設けられました。研究内容やデザインについて活発なディスカッションが行われました。

当該研究会は、医療・介護・福祉等に携わる方向けに行動分析学を学び、さらに行動分析学を基軸にした研究について討論を交わすプラットフォームになることを目指しています。4年前に研究会を発足させた際には約20名で開催しました。その後、第2回は45名、第3回は71名、第4回は87名そして今回は80名でした。医療の領域では確実に行動分析学のニーズが高まってい

ることを実感します。その流れは嬉しくもありますが、ここで改めて研究として取り組む際の方法論の妥当性に注目したいと考えております。その意味でもこの研究会の質保証が重要であり、丁寧に仲間を増やしていきたいと思っております。

末筆になりましたが、当該研究会は、一般社団法人日本行動分析学会の研究会を開催するための助成を頂戴しております。ここに、アルバムのさらなる一ページを報告できますことに心より感謝申し上げます。今後とも引き続きご指導、ご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

医療行動分析学研究会

世話人：鎌倉やよい（日本赤十字豊田看護大学）

幹事：飛田伊都子（滋慶医療科学大学院大学）

事務局：滋慶医療科学大学院大学 飛田研究室

e-mail : koudou2015@yahoo.co.jp

U R L

<https://sites.google.com/site/iryokoudou/>

「第6回医療行動分析学研究会」は、2020年3月8日（日）ウインクあいちにて開催予定です。



第5回医療行動分析学研究会 集合写真

『行動分析学事典』

平成最後の日に、ついに公刊される！

武藤 崇

(辞典編纂委員・主幹)

多くの会員の方々に、ご協力をいただき、ついに、本邦初の『行動分析学事典』が2019年4月30日(「平成」最後の日)に公刊されました。おそらく、このような中項目の事典は「世界初」だろうと思います。今後も、10年毎に改訂していく予定ですので、引き続き、ご協力のほどお願いいたします。まずは、手に取ってくださいますと幸いに存じます。なお、小樽での年次大

会では、特別価格で購入できるように調整中です。追って、詳細はご連絡させていただきます。

【書籍情報】

出版社=丸善出版、総頁数=839頁(箱つき)、ISBN-13: 978-4621303139、サイズ=22.8 x 16.9 x 4.7 cm、価格=2万円(税別)。

<自著を語る>

『応用行動分析学 - ヒューマンサービスを

改善する行動科学 - 』(新曜社, 2019)

島宗 理

(法政大学)

明鏡国語辞典によると、「語るに足る」には、「語るだけの価値がある」と「語る相手として十分にふさわしい」という意味があるそうです。自作自演的なこの記事が前者に値するかどうかはみなさまのご判断にお任せするとして、日本行動分析学会の会員という極めて特殊な読者層が本書を誰よりも深くご理解いただける方々であるという点には間違いがないところです。ですので、ここでは本書のセールスポイントのみ

を手短に述べさせていただきます。

特徴1: 安い。

本体価格2,700円です。比べるべきではないかもしれませんが、ホワイトブックを学生さんに購入させるのはさすがに気が引けます。教科書、参考書に指定しても学生さんの懐にやさしい価格設定となっていますので、消費税が上がる前にぜひ大量にご購入下さい(冗談です)。

特徴2：軽い。

さきほどキッチンスケールで測定したところ346gでした。B6判(128 x 182 mm)で本文308頁(+索引・文献一覧など30頁)、厚さは17mmほどです。これまで『はじめての…』や『一事例の…』を複数冊持ち歩いていた学生さんからは「これ一冊で済むようになったので助かります」という感想をいただいています。ちなみに、これも比べるべきではないと思いますが、『行動分析学事典』(日本行動分析学会編)はキッチンスケールでは重量超過で測定できず、体重計で測ったところ1.2Kgでした。

特徴3：読みやすい。

「世の中の文字は小さすぎて読めない！」というCMが評判ですが、世の中には、最初の章なのに理論的で小難しい話に終始して、なかなか本題に入らず、読者に対するハードルをやたらとあげ、「難しすぎて読めない！」とギブアップされている本が少なからずあります。

本書では冒頭で応用行動分析学の歴史にさらりとふれますが、さっそく本題に入るようにしてあります。また、全編を通し、ところどころ正確さをやや義性にしても、読みやすさを重視した作文をしています。学生さんからはそれでも「難しい」という感想をもらっていますが、よくよく話を聞いていくと、それはむしろ内容の難しさによることが多いようです。この点については後述します。

特徴4：内容の多様さ。

発達障がいや知的障がい、学教教育に関する本はすでにたくさん出版されています。ですので、本書ではこの領域に関する応用行動分析学の話は最小限におさえました。代わりに、スポーツにおけるコーチングや企業における安全管理、乳がんの早期発見プログラムや、宇宙へ行ったチンパンジー、地雷発見ラットの話など、他書ではほとんど紹介されていない行動分析学の研究や実践を紹介しました。応用行動分析学

を自閉症児の療育方法としてしまう誤解を解く一手となればと考えています。ところで、この機会に、これまでに日本語で出版された行動分析学関係の図書を図示してみました。よかったらご参照下さい。



特徴5：内容の深さ。

本書は一般向け、初学者向けの本ではありません。行動分析学や心理学全般の概論は習得済みの読者を想定しています。私が大学で担当している授業でいえば、行動分析学の概論を教える授業では『パフォーマンスマネジメント』、その次の授業では『使える行動分析学』を教科書に使っていて、本書はこれらの授業では参考書として紹介し、実際にフルに使うのは3-4年生の研究法の授業です。

一方で、副題にうたっているように、本書の狙いは、行動分析学や心理学以外を専門に習得した上でヒューマンサービスの仕事をしている人たちへの情報提供でもあります。そのためにも読みやすさ重視の作文や章の構成をしているのですが、本書でいきなり行動分析学の概念的な理解を形成するのは難しいです。行動分析学会の会員のみなさまが、お近くでヒューマンサービスの仕事をされている方々に行動分析学を紹介される場合には、初学者や初心者にとって理解しやすい他書をまずは推薦していただき、それに飛びついてきた方への第二弾として本書をご紹介いただければと思います。

特徴6：シングルケースデザイン法の原理を解説。

日本行動分析学会年次大会の研究発表でさえも、そして国際行動分析学会のポスター発表で

も、ときおりシングルケースデザイン法の誤用をみかけます。おそらく、これまで出版されてきた教科書の内容が不十分だったり、理解しにくかったりしたのでしょう。

毎年十数の実験を学生・院生さんたちに指導しながら直面するよくある間違いを参考に、そして、エビデンスにもとづいた実践を重視する流れの中で、近年、合意形成されつつある、シングルケースデザイン法にもとづいて行われた研究を評価する標準的な基準についても参照しながら、本書ではシングルケースデザイン法の原理と適用方法を詳しく解説しています。

私の場合、誤解している学生さんに「教科書のここを読んでみて」と言えるようになったことで、研究指導が格段と楽になりました。

特徴 7：行動の諸法則を整理して解説。

本書の中盤（第Ⅲ節）では、行動の諸法則を再整理してみました。その目論見は機能主義に徹底することです。好子/嫌子という概念も見直し、より機能的な定義を取り入れています。確立操作についても、なぜ動機づけ操作（MO）と名称変更すべきではないかといった論点も含め、他書にはほとんど記述がない弱化的随伴性における確立操作についても詳しく論考しています。

実はこの節が私にとっては推しセク（ジョン）なのですが、読者にとっては最も理解困難なところでもあると思います。本来は理論的論文として機関誌へ投稿すべき内容だったのかもしれませんが。残念ながら、この挑戦に対する感想や批判も含めた批評はまだどなたからもお聞きしておりません。少々、寂しいです。

特徴 8：行動分析学は学問です。

もう二十年以上前になるわけですが、『行動分析学入門』（産業図書）を執筆したさいに故佐藤方哉先生、杉山尚子先生と共に繰り広げたいくつもの議論の中で、我々が強く合意したことの一つが、「行動分析」ではなく「行動分析学」と《学》をつけて表記していこうということ

した。当時、すでに米国では『我が子よ、声をきかせて』がベストセラーとなり、ロバースらが開発した早期集中療育プログラムが“ABA”と呼ばれ始めていました。このままでは応用行動分析学が科学ではなく、療育方法であると誤解されて広まってしまう。そうならないために、少なくとも我々が何か書くときには必ず「行動分析学」と表記していこうと。

でも、我々のそんな配慮はあまりに微力すぎたようです。TwitterなどのSNSでは「ABAに効果はある」とか「うちの子どもにはABAはあわない」といった文言をよく目にします。効果がある療育方法を開発し、なければ改善していくのが“ABA”ですから、まったくの誤解ですといっても、もはや多勢に無勢の感さえあります。

本書では、行動分析学の学問としての構造も図示しました。より詳しい図は大きすぎて掲載できなかったのでブログで公開しています。シェイピングやチェイニングや、そうした技法を組み込んだ包括的プログラムも、行動分析学の研究成果の一つであり、学問そのものではありません。



このあたりの切り分け方を本として明示することも本書執筆の目的の一つでした。心理学や関連諸学の専門家でさえ上述のような誤解をしている人がいて、誤解が再生産されている様子さえうかがえます。そのような誤解を解く道具として本書を活用していただければ幸いです。

手短かにと言っていたのに随分と長くなってしまいました。これが「語るに落ちる」ということでしょうか。おあとがよろしいようで。

編集後記

今号のニューズレターを無事に発行できたと同時に、ニューズレター編集委員としての仕事を完遂でき、ほっと胸をなでおろしております。

眞邊先生より、ニューズレター編集委員の件でお声がけいただき、気づけば4年という歳月が流れておりました。自分でもここまで長期間にわたり、務めるとは思っていなかったの少し驚きです（NL79号の編集後記をみると、現体制での活動予定は当初2年間の予定だったみたいです）。

この4年間は、編集委員の仕事をさせていただいて自分にとっても本当によかったと思える期間でした。お恥ずかしい話ですが、編集委員をする前は、自身の興味のある記事しかニューズレターに目を通しておりませんでした。編集委員として編集作業を通じ、すべての原稿に目を通すことで、改めてニューズレターの面白さに気づけたのもこの4年間のおかげとっております。

最後になりますが、この4年間、ニューズレターにご寄稿くださいましたすべての先生方、ご愛読いただきました学会員のみなさまに厚く御礼申し上げます。（久保 尚也）

現体制では今号が最後ということで、編集長より「何書いてもいいよ」というお達しをいただき、筆を執らせていただきました。まずは、記事をご寄稿くださった皆様に厚く御礼申し上げます。会員の皆様よりも少しだけ早く記事を読めることが、この仕事の密かな楽しみとなっていました。4年前の学会の懇親会の席にて、その場のノリでニューズレター委員を引き受けたときには、大して人脈もない自分が記事を集められるのか若干不安ではありました。ただし、こちらから執筆を依頼する際はいつも二つ返事で快く引き受けていただき、そんな不安も杞憂に終わりました。

次号からは一読者として楽しみに読ませてい

ただきたいと思います。ありがとうございました。

（古野 公紀）

現体制へと代わった2015年夏号（79号）から今号（95号）まで、ニューズレターの編集に携わらせて頂きました。掲載された記事の数を数えてみたところ、100を超えていました（特に多かった記事は学会関連33、海外学会の参加記16、研究会関連16でした）。担当を任された当初は何もわからず、どのタイミングで、どのように執筆の依頼をすればよいか、失礼はないだろうかと不安もありましたが、執筆依頼をした際、皆様、快く引き受けてくださり、学会が個々の会員により構成されている、ということ、ニューズレターの編集を通して、改めて感じました。

多くの記事を掲載できたこともひとえに皆様のお力添えのおかげです。ありがとうございました。（小原 健一郎）

2015年夏号（No.79）から2019年夏号（No.95）まで2期4年間にわたってニューズレターの編集を久保尚也先生、古野公紀先生、小原健一郎先生および私を含めた4名で担当してきました。今号で任期を終え、次号から新編集担当理事の大久保賢一先生に引き継ぎます。

この4年を振り返ってみると、行動分析学会の主たる事柄としては、坂上貴之先生が理事長に就任され、その最初の年度である2015年にはABAI第8回国際会議が京都で開かれています。年次大会は、明星大学（2015年）、大阪市立大学（2016年）、福島大学（2017年）、同志社大学（2018年）、そして本年度は小樽と日本の南北を交互に行き来して来ました。1995年に紙媒体での出版で始まったニューズレターは、2018年の89号からWeb出版に変わりより迅速な編集・出

版が可能になりました。

私的にも、イタリアへの3ヶ月の短期サバティカルや、大学に就職してから30年目にして始めて自分がマネジメントできる実験室のある職場への異動などの大きな出来事があり、大変印象深い4年間でした。

小原先生に数えていただいたように、100を超える記事が無事出版できたことは、行動分析学会員の皆様のご協力と、久保、古野、小原3先生方のご尽力の賜です。会員の皆様と3先生方に感謝申し上げます。

今後は、一会員としてニューズレターのさらなる発展にご協力できればと念じています。再度、会員の皆様に感謝の言葉を添えて編集業務を終えたいと思います。

ご協力ありがとうございました。

(眞邊 一近)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部心理学研究室

日本行動分析学会ニューズレター編集部 眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp